

『大乘莊嚴經論』第XVIII章第80, 81偈について

早 島 理

[1] 『大乘莊嚴經論』(Mahāyānasūtrālamkāra, MSA) 第XVIII章「賞分品, Bodhipakṣa」の論体構造は (1) lajjā(kās. 1~5), (2) dhṛti(kās. 6~22)…(14) samādhitraya(kās. 77~79), (15) dharma-uddāna(kās. 80~81) の15項目からなり¹⁾, その最終項 dharma-uddāna (四法印) の第一諸行無常と第三諸法無我に対する傍論的論議が, 刹那滅論 (kās. 82~91)²⁾・人無我論 (kās. 92~103) として展開されることは, 承知の如くである。

さてその菩提分の最終項「四法印」³⁾ は2偈 (kās. 80, 81) により説示される。

**samādyupaniṣattvena dharmōddānacatuṣṭayam/
deśitam bodhisatvabhyaḥ satvānām hitakāmyayā//80**

菩薩は [三] 三昧に依拠して四法印を説くのである, 衆生の利益を望むがゆえに。

**asadartho 'vikalpārthaḥ parikalpārtha eva ca/
vikalpopaśamārthaś ca dhimatām tac catuṣṭayam//81**

賢者 [菩薩] にとってはこの四 [法印の意味] とは (1) 非存在の意味と, (2) 虚妄分別の意味と, (3) 唯遍計のみの意味と, (4) 分別の静まった意味とである。

kā. 80 は直前の第14項 samādhitraya に依拠しつつ, dharma-uddāna を説示する意義 (satvānām hitakāmyayā) を, kā. 81 は dharma-uddāna 各々の意味 (artha) を明確にしている⁴⁾。そのうち, 今は後者四法印の意味を考察しよう。

MSA-Bh は次のように云う。

bodhisatvānām asadartho 'nityārthaḥ/yan nityam nāsti tad anityam teṣām yat parikalpita lakṣaṇam/abhūtavikalpārtho duḥkhārtho yat paratantralakṣaṇam/parikalpamātrārtho 'nātmārthaḥ/eva-śabdenāvadhāraṇam parikalpita ātmā nāsti parikalpamātram tv astiti parikalpita lakṣaṇasyābhāvārtho 'nātmārtha ity uktam bhavati/
vikalpopaśamārthaḥ śāntārthaḥ pariniṣpannalakṣaṇam nirvāṇam/

諸菩薩にとって無常の意味とは非存在という意味である。常に存在していないこと, それが無常ということであって, それは彼ら [諸菩薩] にとって遍計所執性である。苦の意味とは虚妄分別と云う意味である。それは [諸菩薩] にとっては [依他起性] である。無我の意味とは唯分別 (構想) のみと云う意味である。「唯……のみ eva」の語は限定 [を示して

いるの]である。構想された自我 (ātman) は存在しない。しかし唯構想のみ (構想しているそのことのみ) は存在する。それゆえに [諸菩薩にとって] 無我の意味とは遍計所執性の非実存という意味であると説かれている。寂靜の意味とは妄分別の静まったと云う意味であり、涅槃 [と云うこと] である。[それは諸菩薩にとっては] 円成実性である。

MSA が説示する四法印の新たな意味とは、三性説に依拠したものであると、Vasubandhu 著とされる MSA-Bh は明言する。つまり、古来伝承されたきた四法印の教義を瑜伽行学派が継承するに際し、伝統的な教義を受け継ぎつつ、同時に三性説を導入して四法印を新たに甦えさせたのである。紙面の制約もあり、以下には、「諸行無常」を中心に考察を進めよう。

[2] 「無常」とは、伝統的な意味合からすれば、この世界の有為なる存在はすべて一瞬たりとも止まらず、変化・消滅し虚ろい行くことであり、厳密に云えば刹那滅ということである。ところが、MSA は無常の意味とは「*asat*, 非存在」であると云う。さらに、それは「*dhimatām*, 賢者にとって」(MSA-Bh: 「*bodhisatvānām*, 諸菩薩にとって」) であり、遍計所執性の視点からであると MSA-Bh は強調する。他方、無常の従来の意味について「無常の意味は依他起生からすれば刹那滅という意味でもある、と理解すべきである⁹⁾」と MSA-Bh は説く。つまりこうである。MSA は、古来受継がれてきた「四法印」の教説を三性説に依拠して受持し、さらに四法印の第一「無常」について、再び三性説の視点から瑜伽行学派独自の解釈を開陳する。無常とは遍計所執性の視点からは「非存在」の意味である。これは大乘の菩薩のみにとってである。同時に依他起性からすれば、従来の「刹那ごとの生滅」の意味であり、大乘の菩薩に限るものではない。

三性説に依拠して MSA が提示した無常の新たな論議について、(1) MSA の偈頌において既に意図されていたのか、あるいは MSA-Bh の段階で導入されたのか。(2) 無常を三性説の視点から論議する意義、の二点が解明されなければならない。

[3] MSA の無常論のように、伝統的な教義を継承しつつ、三性説を導入してそれに新たな意味を付加し、従来の教義を大乘仏教瑜伽行学派の立場から蘇生させることは、初期の瑜伽行学派のテキストにおいて散見されるところである。

『中辺分別論』(以下 MAV; Vasubandhu 釈—MAV-Bh) が三性を「*mūla-tatva*, 根本真実」(III-3) と位置づけ、それに依拠して種々の論議を展開していることは良く知られている。無常に関連して云えば、無常 (III-5c~6b)・苦 (6cd)・空 (7ab)・無我 (7c~8a) (いわゆる苦諦四遍知) について、それぞれ三性説に依拠して論じ

るのである⁶⁾。今は III-5c~6b を引用する⁷⁾。

**asadārtho hy anityārtha utpādavyayaalakṣaṇaḥ//5cd
samlāmalabhāvena mulatatte yathākramaṃ/6ab**

無常の意味は、まことに実在でないという意味であり、生じては滅する相のあるものであり、また垢れをとまなうと垢れがないとのあり方をもつものとして、根本の真実の上に順次見られる。

このように、無常の意味が、遍計所執性からは「*asat*, 非存在」、依他起性からは「*utpādavyaya*, 生滅」、そして円成実性からは「*samlāmala*, 有垢・無垢」であると MAV の偈頌自体が明示している。「遍計—非存在」は MSA, MAV に共通であり、依他起について、MSA-Bh「利那滅」、MAV「生滅」は同質である。MSA が触れていない円成実について MAV は「有垢・無垢」と云う。

さらに、漢訳に無着造とされる『頭揚聖教論』(以下『頭揚論』)「成無常品」第四は、同じく無常の意味について次のように説く。

頌曰、無性義無常 遍計之所執 所餘無常義 依他起應知 (kā.5)

論曰、無性義所攝無常義、當知遍計所執相攝。餘無常義依他起相攝。圓成實相中無無常義。

同論書は先だつ kā. 1, 2 において「無性無常、失壞無常、転異無常、別離無常、得無常、當有無常」の六種無常を説くのであるが、その無性無常を遍計に、余の五種の無常を依他起に対応させ、円成実には無常義は存しないという云う。kā. 2の釈に「此中無性無常者、謂性常無故名曰無常」とあり、「無性」とは「非存在」の意である。余の五無常について同論書は何も語らないが、『声聞地』に説かれる「五種行(ākāra)—五種無常⁸⁾」との対応を考慮すれば「利那ごとの生滅」と理解されよう。これは、円成実を除き MAV と同内容と受け止めることができる。

これまでの論述は、以下のように要約される。

- (1) 瑜伽行学派は三性説を導入することにより、無常について伝統的な教義に同学派独自の哲学的解釈を付与した。無常とは遍計からは「非存在」であり、依他起からは「生滅—利那滅」である。円成実については言明が異なる⁹⁾。
- (2) このことは、MAV, 『頭揚論』では、偈頌自体において明白である。
 - (2-1) MSA kā. 81a は「*asat*, 非存在」と説くのみであるが、① MSA の偈頌の段階で三性説が説かれている、② MAV, 『頭揚論』の無常義と比較すると、MSA 頌の「*asat*, 非存在」を三性説に依拠して理解することは不自然ではない、

③ MSA-Bh もこの理解を支持する。

(2-2) それ故、MSA 偈頌の「asat」は三性説に依拠したものと理解することができる。

(2-3) MSA XVIII kās. 82~91 の利那滅論は、一見三性説と無関係の如くであるが、kā. 81a で遍計所執性に基づく大乘の菩薩にとっての無常義が説かれ、さらに kā. 82 以下で依他起性に基づく無常義——それは菩薩・声聞に共通——を展開している、すなわち MSA の利那滅論は三性説を基盤に説かれていると理解すべきであろう¹⁰⁾。

(3) したがって、初期瑜伽行学派のいわゆる「Maitreyanātha-Asaṅga」の伝承の中で、三性説に依拠した無常論の新たな展開のあったことが認められる。

(4) 三性説に依拠して「非存在」を無常の意味とするのは、大乘の菩薩のみにとってであり、大乘の立場が強調されている¹¹⁾。

[4] MSA, MAV, 『顕揚論』など初期の瑜伽行学派のテキストが、無常について三性説の視点から議論を深めた意図を、再度確認しておきたい¹²⁾。

これら三論書は、無常とは遍計所執性からすれば「asat」であるとすが、その内実について何ら語ることはない。他方、Sthiramati の Sūtrālaṃkāraṣṭṭibhāṣya (SAVBh) は kā. 81a について、「諸菩薩にとっては「生滅」という意味 [だけ] が無常の意味なのではなく、「何処にも如何なる時にも存在しない」という意味が無常の意味なのである。さらに、「如何なる時にも存在しない」とは如何なることか。[答えよう。] 有為なるものが [實在・持続すると] 構想する人 (pudgala) と構想されたもの (dharma) とは、兎の角のように存在しない。構想されたあり方は常に實在ではない、という意味が無常の意味である¹³⁾」という。すなわち、人やものが持続的に實在すると、遍計執する主体もされる客体も存在しないという意味で「asat」であるという。

さらに、三論書とも、有為なる存在の利那ごとに生滅をくりかえり方を依他起性とする。つまり因果相対して縁起する世界、それこそ依他起性なのだが、それは利那滅に他ならない。しかしこの世界を我々が認識するや否や、本来利那滅であるこの世界が、そのまま、持続し實在するものとして現れてくる。その意味で、利那滅のあり方は我々には無縁の世界である。現実には我々と同じ世界を認識した瞬間に、利那滅の世界は何処にもありえないのだから。この唯一の世界が我々に現われるのはいつでも、どこでも、持続・實在するものとして認識する私と、認識される世界として、遍計執されたあり方のみである。

云われているように、「三性説の構造においては、依他起性は遍計執せられたあり方への根底となる」のであり、その依他起性は「転換的に常に遍計執的なあり方へ向かって墮落する傾斜をもっている¹⁴⁾」。それゆえ依他起的な利那滅存在は、一定の期間持続し実在すると遍計執されるあり方に転落する危険性をいつでも含んでいる。したがってこの世界を認識するや否や、本来利那滅であるこの世界がそのまま、持続・実在する世界として我々には現れてくるのである。それゆえ持続・実在的にとらえる「遍計執する人」と「遍計執される世界」との絶対的な非存在が「無常の意味」として強調され、それこそが大乗の菩薩のみにとっての無常義であるとされたのである。

- 1) 三十七菩提分法 (kāś.42~65) を第9項目とする、15項目からなる MSA XVIII の Bodhipakṣa の構造が、『菩薩地』XVII Bodhipakṣya のそれを継承していることは明白である (両者の対応関係については、宇井『瑜伽論研究』、「第六菩薩地と大乘莊嚴經論」p.72, 拙稿 DHARMAPARYEṢṬY ADHIKĀRA Part IV, 1982, p.92, APPENDIX, TABLE I 参照)。両論書が、伝統的に保持伝承されてきた「三十七菩提分法」を継承しつつ、それを増補拡充して15項目からなる自らの菩提分法を提唱した経緯は必ずしも明白でなく、そもそも「lajjā, dhṛti...samāhitraya, dharma-uddāna」の各項目を菩提分法に編入した意図も定かではない。SAVBh(P. 156b7~) が教証として引用する『聖無盡慧經』の主題項目 (やその経説内容) が MSA のそれとある程度共通している点に留意する必要があるであろう。いずれにせよこの学派にとって「菩提分法」が意味するところの解明は今後の課題である。
- 2) MSA や『顕揚論』を中心とした瑜伽行学派の利那滅論に関する筆者の従来の研究については、拙稿「利那滅と輪廻轉生」(長崎大学教育学部「社会科学論叢」No. 50, 1995, 6) 及び同 p.26注(3)参照。
- 3) 四法印に関する従来の研究については、藤田宏達「三法印と四法印」(橋本博士退官記念『仏教研究論集』S.50), 袴谷憲昭「〈法印〉覚え書」(『駒沢大学仏教学部研究紀要』No. 37 S.54), 吉元信行『アビダルマ思想』(法蔵館 S.57 pp.327~331), 高崎直道「〈諸法無我〉考」(中村瑞隆博士古希記念『仏教学論集』S.60) 等参照。
- 4) 三三昧, 四法印, 三性説及び四法印の意味の関連を図式的に示す。

(四法印)	(三三昧)	(三性説)	(意味)
	kā. 80	kā. 81	
無常 ……	無願	遍計所執性	asad-artha
苦 ……	空性	依他起性	abhūtavikalpa-artha
無我 ……	無相	parikalpītalakṣaṇasyābhāva-arthaḥ	parikalpamātra-artha
寂靜 ……	円成実性	vikalpopaśama-artha	

- 5) kṣaṇabhaṅgārtho 'py anityārtho veditavyaḥ paratantralakṣaṇasya/(149, 11~

12).

- 6) MAV を承知していた『成唯識論』が「三性四諦相攝云何。四中一一皆具三性。且苦諦中無常等四各有三性」(vol. 8, 47b) として二重に三性を充当し、「無性無常, 性常無故——遍計所執性; 起盡無常, 有生滅故——依他起性; 垢淨無常, 位轉變故——円成実性」と論じていることは、周知の如くである。
- 7) 翻訳は長尾雅人, 大乘仏典『世親論集』(中央公論社)による。なお MAV-Bh は以下の如くである。trayo hi svabhāva mūlatatvaṃ/teṣu yathākramam asadārtho hy anityārtha utpādayayārthaḥ samalāmalatārthaś ca/.
- 8) 『聲聞地』vol. 34, 473~, Śrāvakabhūmi (ed. by Śukla) p. 489~ 参照。
- 9) 「諸行無常」から理解されるように、無常は有為なる存在についての言明である。したがって円成実性に関して「圓成實相中無無常義」とする『顯揚論』の方が、「有垢・無垢」とする MAV よりも、筆者には理解しやすい。MAVṬ は「samalāmala-tvārthalaḥṣaṇenāgatukenānityārthenānityo `vikāradharmo `pi pariniṣpannasvabhāvaiti/」(ed. by Yamaguti, p. 117), すなわち円成実は自ら無常なのではなく、客塵により有垢になり本来は無垢であると釈し, āgatuka 客塵の意味で無常であるとする。この解釈は上掲註(6)『成唯識論』の「垢淨無常, 位轉變故」に引き継がれている。
- 10) 三性説を基盤に MSA が利那滅論を展開する意図については、拙稿「外なるもの」(完), 長崎大学教育学部「社会科学論叢」No. 39, p. 19~20 註(1)参照。
- 11) 『顯揚論』も「成無常品」末尾に「無常性見当知六種 ……三声聞智, 謂除無性無常義。四菩薩智, 謂於一切無常義。」(vol. 14, 551a) と説き, 無常の意味を「生滅」とする伝統的な解釈は小乗の声聞にも理解されるが, 三性説に依拠して「非存在」と受持しうるのは, 大乘の菩薩のみであることを強調している。
- 12) 拙稿「無常と利那」(『南都仏教』59, 1988) p. 28 以下参照。なお瑜伽行学派, 特に MSA の利那滅論は三性説とは関連しないという, 筆者と意見を異にする解釈については, A. von ROSPATT, “THE BUDDHIST DOCTRINE OF MOMENTARINESS” (Stuttgart 1995), および上記註(2)拙稿中 p. 28 (補注 1) を参照されたい。
- 13) SAVBh P. 156b, D. 132a.
- 14) 長尾雅人「唯識義の基盤としての三性説」(『中観と唯識』) p. 736 以下参照。

本稿は平成7年度文部省科学研究費(一般 c)による研究成果の一部である。

<キーワード> 四法印, 三性説, 無常義, 利那滅

(長崎大学教授)